

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	韓文公（承前）：雜錄
Author(s)	杏城生
Citation	龍南會雜誌， 5 7： 1 6 - 3 7
Issue date	1897-06-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4836
Right	

タイレルに估料せりと云ひ法王レオ十世はベチシャ人より八萬八千タイレルにて一顆の眞珠を購ひたり眞珠貝產地に於ける主治者は大抵大眞珠を秘藏することなるが我邦に於ける大眞珠は記録若くは話説に上れるを聞きたることなきは遺憾なり終りに臨み謹んで割驗の際恩師の懇切なる指導を謝す

(完 結)

雜 錄

韓 文 公

(承 前)

杏 城 生

第五章 在朝時代

(一) 貞元の末政

予は第三章に貞元の初政を叙するに當り當時天下の形勢は愈をして大々的決心を爲さまひるに至りしことを述べたり。而も貞元十一年五月京師を去てよりこの方、前後八年、彼が汴徐の野に落魄乏つゝあるの間、世の形勢は如何になりゆきしぞ。

陸贄の力によりて一時靜謐に歸したる藩鎮はその去ると共に、又もや動搖し始めぬ。又傳ふ回鶻も將に入て寇せんと。然れども今翻て内廷の大臣如何を顯みるに、彼等はこの間にあつて自黨を植うるに汲々たるのみ、又他を顧みず。否、彼等と雖ども天下の平和と、國家の祝福とを欲せざるにあらざるべし。然れども彼等は私利を國家の犠牲に供するに、は餘りに小なる心膽を有す。彼等は賢人を容るゝには餘りに小なる心胸を有す。是に於て彼等と身を國家の犠牲に供するものとの間に、大なる徑庭を

生ずるなり。是に於て乎、その間に、反目は生ずるなり。後者の隆盛は國運の勃興にして、前者の發達は國家の滅亡なり。而も前者其れ自身は自らその發達は國家の滅亡たることを知らざるなり。延齡が陸贄を追まも之が爲にまて、陸贄の延齡を去らんとせしも又之が爲めなりき。然れども四圍の事情は遂に陸贄をして去るの止むを得ざらしめたり。陸贄の延を去るは後者の衰退を意味し、又前者の發達を意味す。然らば國運の何れの方向に消長しつゝあるかは一見して知るに足らん。

陸贄は去りぬ。延齡は顧慮なく其の運動に着手せり。彼は又もや李元張傍、李錡等を讃して長史に下せり。彼は今や自黨を植へんが爲めに、陸贄の黨をその根底より拔去せんとするものなり。

勿論宰相諫官の中、身を犠牲にして陛下に論争するものなきにあらずと雖も、彼等の紛々は偶々以て德宗をして、彼等の厭苦を増さしむる媒介たるもの。故を以て遂には德宗をして又宰相に任せず、御史刺史縣令より以上皆自ら選用して、中書は只文書を行ふのみに至らしめたり。而も其の深く禁中に居て信を取る所の者を窺へば、則裴延齡、李齊運、王詔、李實、韋執誼、韋渠牟の輩なり。而して彼等が趨附門に盈ち權宰相を傾くるを見れば其の内情察するに足らん。

廷臣の腐敗は又財政の紊亂を意味す。廷臣の腐敗は遂に進奉の弊と、破廉恥なる宮市の制とを來せり。是れ財政の全く紊亂を示すにあらずや。先づ歴史が悪むべきこの風習を如何に攻撃するかを見よ。史に曰く

初め德宗奉天窮乏なるの故を以て宮に還て以來尤も意を聚斂に專にし、藩鎮多く進奉を以て恩を市ふ、皆な税外の方圓といひ、亦用度の羨餘といふ。其實は或は常賦を割き留め、或は百姓に増斂し、或は吏錄を減刻ま、或は疎賔を販鬻す。往々にして私に自ら入れ。進むる所は纔に什の一二、李

兼江西に在て月々に進むるあり。韋臯西川に在て日々に進むるあり。其後常州の刺史裴肅進奉を以て浙東の觀察使に遷る。刺史の進奉は肅より始まる。劉贊卒するに及んで判官嚴綬留務を掌る。府庫を竭して以て進奉す。徴して刑部員外郎となす。幕僚の進奉綬より始まる。

又曰く

是より先き宮中の市、外間の物、官吏をして之を主らしむ。隨て其の値を給す。此歲宦官を以て使と爲す。之を宮市といふ。買人の物を抑へ、復た白望數百人を兩市及要關坊に置き、曲に人の賣る所の物を閱え、但た宮市と稱すれば則ち手を斂めて付與し眞偽、復た辨すべからず。敢て從て來る所を問ひ、また價の高下を論するものなし。率ね直百錢なる物を用ひて、人の直數千なる物を買ふ。多くは紅紫染の故衣、敗縐尺寸を以て裂て之を給す。仍は進奉の門戸及び脚價錢を索む。人、物を將て市に詣り、手を空ふして歸るものあるに至る。名は宮市と爲すも其の實は之を奪ふなり。勅使出る毎に、漿を沾り餅を賣るの家と雖ども、皆業を撤て門を閉づ。

嗚呼是れ何といふ事ぞや、堂々たる朝廷、富四海を有つもの、いまだ小人と分毫の利を爭ひ、甚たしくは白はに奪ふて之を有するに至る。是豈人君の道ならんや。又是歴史上有り得べき事實ならんや。或は曰く

匹夫交易價不相値、取而有之、傍觀不平、廉者愧耻、富有四海、而行同匹夫、書之青史、千古不泯、豈非永鑒乎。

財政の紊亂は又兵權の不振を意味す。彼等は財政に缺乏を感じるが故に姑息の政策を取るより外なきのみ。若し其れ歴史を繼ひて徳宗の末政を検せば、藩鎮の驕放なる證左歴々として見ることを得べ

し。史家亦評す、德宗の前後百年藩鎮の驕敖なる貞元を最も甚だしとなすと。可憐延齡等の無定見は遂に事をしてこゝに至らしめたるなり。

彼等は黙して兵柄を宦官に分てり。彼等は黙て進奉を以て官に徴するの例を開けり。彼等は黙して宦者に宮市の制を許せり。無らば廷臣の腐敗と、財政の紊乱と、兵權の不振とは全然彼等の罪なり。嗚呼廷臣は腐敗せり、財政は紊乱せり、兵權は不振なり。而も驕敖なる藩鎮は周圍に羅列して吾が虚に乗せんとし、貪亂飽くなきの同鵠は遠く吾が呼吸を窺ふ。嗚呼唐朝の運命岌々乎として其危ひ哉。或け曰く

德宗即位之 銳然一 下之志、四 之内、爲不世出之主也、不數年而致大乱何哉、其大弊有三、一曰姑息藩鎮、二曰委任宦官、三曰聚斂貨財、夫志大而才小、心褊而意思、不能推誠御物、尊賢使能、以爲果敢聰明、足以成天下之務、初欲削平僭叛、剷滅藩鎮、一有奉天之乱、而心隕膽破、惴畏姑息、惟恐生事、既猜防臣下、專任官者、思其窮窘、則長歛倍刻甚於初矣、是以藩鎮彊而王室弱、宦官專而國命危、貪政多而民心離、唐室之亡、卒以是三者、其所從來者漸矣。

既にして裴延齡死すと雖ども、其の黨與は依然として内廷に蟠屈せ又人の近づくことを許さず。彼等は又謀て陽城を去れり。陽城の去るは、又彼等の隆盛一步を進むるを示す所以なり。危險は一步に一步を進む。寧ろ藩鎮の公然叛せざるを以て幸とするのみ。

(二) 彼は如何にして、其の責を盡さんとするか

斯くの如き光景は、再び京師に入り來れる韓愈を去て一日も猶豫すべき秋にあらざることを覺悟せしめたり。彼は是より如何にして彼一人の責を盡さんとするか。

彼が嘗て洛に苦學せしはその責を盡さんが爲めなりき。彼が京師に來りしも之が爲めなりき。彼が光範門下に伏して書を宰相に上りしも之が爲めなりき。彼が京師を去りしも之が爲めなりき。彼が澤州に仕へしも、徐州に趣きしも、洛陽に退隱せしも亦之が爲めなりき。殊に知らず彼は如何にして如何なる方法を以て其の責を盡さんとするか。彼が胸中如何なる成算かある。彼が一生の方針は如何なりしぞ。彼は何に據て以て立たんとしたるか。

思ふに彼が始めて京官たるの命を受けたるの日、彼は深く考へ厚く思ひたるなるべし。彼が一生よりして之を徴するに、人心を其の根底より改革し去ること尤も彼の主眼なりしが如し。彼は當時老佛の教へに浸潤せる人心を儒教の常識を以て洗ひ淨めんと思ひしなり。之を以て彼が第一に置きしは故なきにあらず。何となれば現時の社會其の爲すべき任務を擧ぐれば、教育先づその第一に居るにあらずや。法にして善美を盡すと雖ども、その之を運用する人に乏て、之を用ゆるの識なくんば又何の效をか爲すべき。そのこれを運用する人にして善あらば、法不完全なりと雖ども決して之を顧みるに及ばざるにあらずや。然れども彼は之を爲さんが爲に身を全く儒學の研究に委ねんと思はざりき。何んとなれば彼は教へんよりも寧ろ施さんとせられたるなり。

彼は之が爲に人材登庸を以て事の最急なるものとせり。人材の登庸は、清明なる政治を意味す。清明なる政治は天下の和平を意味す。彼が極力、人材の登庸を主張せしは固より其の處なり。予はこゝに彼が經歷より之を概括せんよりも寧ろこゝにその經歷を列するの優れるに若かざるを覺ゆ。

(三) 國子四門博士

彼嘗て曰く

士之行道者、不得於朝則山林而已矣、山林者、士之所獨善自養、而不憂天下者之所能安也、如有憂天下之心、則不能矣。

又曰く

君子居其位、則思死其官、未得位、則思修其辭以明其道。

而して今や彼は朝に立てり、國子四門博士となれり、位を得たり、その盡すべき時期は來れり。吾人は今刮目して、彼が如何なる事をなすかを見んと欲す。

或は曰く、英オの社會に立つや、彼は常に現今の職を以て満足するものにあらず。彼が識は常に其の職に超へ、その腕は常に遠く其の地位より敏なり。彼が眼は常に四方に轉じ常に何物かを求む。而て彼の之を見出すや、全身の力を奮ひ、之に向て進み倒れて後已む。彼亦此くの如し。彼は之を例へば彈裝せる銃の如し、バチを引けば直ちに飛び出でんとす。果然事は起れり、彼は何物かを見出しぬ。

貞元十八年は一月より五月に至るまで天一滴の雨を降さず。こゝに畿内は一般に饑饉とうはされぬ。是に於て廟堂の臣は互に頭をやましめ、謀てこゝに當年七月吏部の選舉と禮部の貢舉とを罷むるに至れり。蓋彼等の意に思へらく歳此くの如く旱にして若し舉選あらば人士こゝに輳集し、爲に米價の涌貴を致さんと。

然れども此の事や其の關係する所頗る大、宜しく精細に事の利害輕重を權り、然る後、行ふべきなり。然るを若し徒らに人士のこゝに輳集し民心の動搖するを以てし、軽く停を議せば、仕進門なくして害後日にあらん。夫、人材登庸は國家第一の急勢なり。天下一度び凶歲あるも可なり、而も國家一日も

人材なからざるべからず。嘗て宰相に書を上りて人材長育の一日も忽にすべからざるを説きたる韓愈は、この停議の正しく一大問題たるを氣附けり。彼その論今年權停舉選狀に堂々君臣の責を論じて曰く。

臣聞古之求雨之詞曰、人失職、歟、然則人之失職、足以致旱、今緣旱而停舉選、是使人失職而召災也、臣又聞君者陽也、臣者陰也、獨陽爲旱、獨陰爲水、今者陛下聖明在上、雖堯舜無以加之、而群臣之賢、不及千古又不能盡心於國、與陛下同心、助陛下爲理、有君無臣、是以久旱、以臣之愚、以爲宜求純信之士、骨鯁之臣、憂國如家、忘身奉上者、超其爵位、置在左右、如殷高宗之用傅、周文王之舉太公、齊桓公之拔甯戚、漢武帝之取公孫弘、青閨之餘、時賜召問、必能輔宣王化、銷殄旱災。

嗚呼、是れ明りに在朝諸臣の不徳不忠を罵盡せるものにあらずや。是れ明かに陰陽の不平、有臣無臣を以て廷に責むるにあらずや。是れ明かに選舉の以て停む可からざるのみならず、又賢を取るに尋常選舉の外に於てすべまどの意にあらずや。而して權停舉選の意を尋ぬるに韓愈の所謂

道路相傳皆云、以歲之旱、陛下憐憫京師之人、慮其乏食、故權停舉選、以絶其來者、所以省費而足食也。

のみ。彼之を駁して曰く

臣伏思之、竊以爲十口之家、益之以二人、於食未有所貴、今京師之人、不啻百萬、都計學者、不過五七千人、併其僮僕畜馬不當京師百分之一、以十口之家計之、誠未爲有所損益、又今年雖旱、去歲大豐、商賈之家、必有儲畜、舉選者皆資持資用、以有易無、未見其弊。

然るを當時廟堂之上にありて、國是を議するもの只舉選を停むるを以て救荒の奇策となす。其の朝に

立つの伎倆大概推知するに足る。舉朝碌々充位一人の用ゆるものなき明かなり。愈々よく之を知れり。彼は之を救ふに獨り眼前の權停を以てすべからざるを知れり。彼は人材を擧ぐるに禮部の試吏部の選以外に不次の典を以てせざる可らざることを知れり。於是乎彼の意見は權停選舉を借て出で『苟有所知、不敢不言』底の意氣を以て、西仲の所謂『請於疏遠下賤中、求奇才異能盡心國事者、待以不次之典、置諸左右、時賜召問』に至りしなり、熟れども遠大の識決して、近眼者流の察し得べき所にあらず。彼が光順門に詣で、狀を奉りしも、其效なかりしは、周より其の所ならんのみ。

(四) 監察御史

彼既に狀を奉りて人の拒む所となる。然れども力あるものは、早晩認識せられざる可らず。彼が息みなき精神は漸く心ある人々の知る所となり、貞元十九年彼は國學の徵位よりして、監察御史の顯位に上れり、時に年三十六。思ひ見よ彼が洛に赤貧洗ふが如き中にあつて苦學するの時、彼が箠を負ふて京師に出で、蓬累して巷を東西に彷徨せし時、彼が馬燈の第に食客となり、家兒に業を授くる傍ら自ら勉學せしとき、彼が光範門下に伏えて書を宰相に上りて成らず、全く廟閣を斷念して、藩鎮に運命を見出さんとして京師の門を出で、時、彼が童關に二鳥賦を詠せし時、彼が鄭夫人を失ふて、全く悲觀に陥り、田橫の墓前に乾坤只一人の我のみなるを觀せしとき、汴州に復志賦を歌ひしとき、徐州に全く退隱を期せし時、誰れか今日あるを知らんや。監察御史の職、未だ左程に尊ぶに足らずと雖ども、言責の職、又重要な位地なりといふべし。彼今この地位を得、彼が感慨思ふべき哉。

然れども鯁直大才憂國の士、歩一步を進むるは彼が腕を振ふの烈しさ一度を増す所以にして、又その地位を危ふする所以なり。小人位高ければ意安く、君子位高ければ心常に憂ふ。小人位高ければ情

實よく、我が地位を強固にすることを得、君子位高ければ心を盡し事を成すの間、又勢ひ小人と衝突するを免れず。見よ愈の位進みて活動の度激に、其の地位の益々危きを。貶陽山令の辭令は彼の足下に顯れいでんとするにあらずや。

《五》陽山の令

かゝる間に内廷の腐敗は愈々増し來れり。惡弊は惡弊の上にかさなれり。而も廷臣一人の身を捨てて之を爭ふものあらざるなり。愈や今監察の職にあり固より言論の責あるもの、宮市の制の如き彼が決して忍ぶ能はざる所なり。言は機會を待て出でんとす。

まばらくにして不幸は不幸に更り來れり、貞元十九年は又もや旱魃と稱せられぬ。

是年京師旱、田畑少所收、上憐民無食、征賦半已休、有司恤經費、未免煩徵求、富者既云急、貧者固已流、傳聞閭里間、赤子弄渠溝、桂男易斗粟、棹臂莫肯酬。

是れ愈當時の慘景を寫せるものなり。彼が謂ふ所によれば、彼一日衢路に出で饑へたるものを見、道路の尸に逢ふ毎に久しく佇立して叩頭し、家に歸るも尚ほ食すること能はざりしと。時に報あり、進奉の風の上下を浸潤せる、享兆尹李實も又之に倣ひ、天子已に半ば征賦を休めしに拘はらず、強て徵求して進奉に給すと。聯想は聯想と相撃てり。彼はその慘虐を思ひて憤懣に堪へずなりぬ。彼は同じく監察御史たる柳宗元、劉夢得等が何故に之を默視するやを怪めり。彼が憤懣は遂に彼を驅つて同官張置、李方叔等を誘ふてこゝに御史臺上論大旱人饑狀を草するに至れり、彼先づ冒頭災荒の甚だしき、他年の災荒と同じからざる由を述べて曰く

右臣伏以今年已來、京畿諸縣、夏逢亢旱、秋又早霜、田租所收、十不存一、

次に蠲免の事を説ひて曰く、

陛下恩諭慈母、仁過春陽、租賦之間、例皆蠲免、所徵至少、所放至多。

次に民情の上達せず、旱饑極るの状を叙して曰く、

上恩雖弘、下困猶甚、至聞有棄子逐妻、以求口食、折屋伐樹、以納稅錢、寒餒道塗、踰陷溝壑、有者皆已輸納、無者徒被追徵、臣愚以爲、此皆群臣之所未言、陛下之所未知者也。

次に施すべき策を謂て曰く、

臣竊見陛下憐念黎元、同於赤子、至或犯法當戮、猶且寬而宥之、況此無辜之人、豈有知而不救、又京師者、四方之腹心、國家之根本、其百姓宜倍加憂恤、今瑞雪頻降、來年必豐、急之則得少而人傷、緩之則事存而利遠。

最後に京兆府李實を責めて曰く、

伏乞特勅京兆府李實、應今年稅錢及草粟等、在百姓腹內、徵未得者、玆且停徵、容至來年蠲麥、庶得少有存立。

狀は奉られぬ。宰相杜佑之を納れしも而も幸臣等の讒は遂に彼を張置、李方叔等をして朝を去るの止むを得ざるに至らしめたり。彼は遂に陽山の令に貶せられぬ。彼は此くの如くして復び藩鎮の臣となり。

彼自ら當時追はるゝの光景を叙えて曰く、中使は門に臨んで之を責め、頃刻も留ることを許さず。病妹(妻の)床褥に臥え、一タビ分るれば幽明を隔てんこと知るべからず。悲み啼ひて別に就かんことを乞ふも許さず。妻は稚子を抱て出で、拜し人前慙羞を忘る。彼は憂を含んで京師を出でぬ。彼は遂に

翌年(二十年)春陽山に着しき。途上詩あり。中に曰く、

既不廻顧、行々詣連州、朝爲青雲士、暮作白首囚、商山季冬日、冰凍絕行轡、春風洞底浪、出沒驚孤舟。

陽山の事本傳には上疏して宮市を極論し坐貶せらるるを爲し洪興祖の年譜には、全集に論宮市疏なきを以て、只天旱人飢狀によりて貶せらるることす。予思ふに愈宮市の弊を見、之を論することなくして止むものにあらず。陽山の事必らずこの二つによりてならん。愈の京師を追はる、光景によりて知るべし。惜むらくは全集論宮市疏なきを。

(六) 王伾の黨

彼は陽山の令に貶せられたり。赤手以て廻瀾を既倒に挽回せんとせし憂國家は、復び閑職に投せられたり。然れども彼は倒底こゝに終るものにあらず。彼は倒底出づる事なくしては止むものにあらざるなり。見よ時勢が如何に彼を要しつゝあるかを。然れども彼が廟堂に立つことを叙する前に當り、吾人をえて先づ爾後時勢の變轉に就て語らしめよ。

愈が御史の官を去て陽山に趣くの時に當り廷臣中に微位より起りて内外の政を改革せんとする野心家出で來れり。王伾王叔文の黨是なり。彼等が如何なる處に生れ、如何なる位地の人にして、又如何にして太子に接近するに至りしや之を知らず。只歴史は報じて曰く翰林待詔王伾善書、王叔文善碁、俱出入東宮、娛侍太子、と。吾人が彼等に就て知る所のもの只是のみ。然れども吾人は彼等が前後の行爲によりて當時無爲の廷臣中、確かに敏腕の策士たるを確信するものなり。歴史は彼等が計謀の公然ならざるを以て稱して詭譎多詐の士となすと雖も、當時腐敗せる内廷、微位より興りて改革を爲さんと欲せば勢ひ幾多の權謀によらざる可らず。彼等は手段を以て目的の犠牲となしたるものなり。

彼等は内廷の腐敗を知れり。府庫の欠乏と財政の困難とを知れり。藩鎮の強暴と兵權の漸次宦官に

移り行くことを知れり。彼等は之を救ふには人材を登庸して内廷の腐敗を一掃し、敏腕の士を擇んで財政の整理を委ね、兵權を宦官の手中より奪ふて之を名將の下に歸せ、然る後強暴なる藩鎮を制せざるべからざることを知れり。之を爲さんが爲めには是非とも上は惟一の主權者の信任を得、下は朝野の名士を以て已の藩屏と爲さざる可らざることを知れり。彼等は之が爲にあらゆる手段を取りぬ。彼等は剛愎自ら用ゆる德宗を捨て、聰明なる太子順宗を擇べり。彼等はあらゆる全力を盡して朝野の名士を網羅せり。結ぶ所のもの翰林學士には章執誼あり、監察御史には韓泰、柳宗完、劉禹錫あり、其他陸淳、呂溫、李景儉、韓曄の如きあり。又凌準、程元を加へ、時機を得て大に其の羽翼を張らんとす。事業は着々施されたり。

既にえて德宗の病あらたまるや、佗先づ入て詔と稱し叔父を召して翰林の中に坐し事を決せしめ、萬般の準備を爲せり。己にして德宗崩じ、順宗位につくや、叔父は直に順宗に薦めて佗に顯官を與へぬ。是彼が其の黨の權勢を形成せし第一着なりき。次に彼は金吾將軍莊希朝を以て左右神策諸行營の節度使となし、韓泰を以てその行軍司馬となさんと企てぬ。宦官の兵柄を奪はんが爲めに。次に彼は章執誼を引きて相となさんとせり、國政を全く吾黨の權内に歸せしめんが爲に。彼は凡てを排して之を爲しぬ。

彼が計謀は成れり。章執誼は同平章事となり、左右神策行營節度使たるの命令は莊希朝に下れり。彼は又財政を整理せんが爲に杜佑を以て度友等使となし、已れ自ら其の副使となれり。彼は於是財政の三權を全く吾が黨の掌中に握るを得たり。今や彼が活潑なる運動は顧慮なく始まりぬ。彼は先づ奏して天下に大赦して、德宗の怒により貶せられたる人々を許しぬ。韓愈は又この時赦されて、

陽山の令より、江陵府の法曹參軍に遷りぬ。次で諸糧の逋負も一切之を免せり。次に彼は内廷腐敗の最大原因たる進奉を嚴禁せり。次に禁せられたるものは宮市の制なり、五坊の小兒なり。是皆な貞元の末政、人の患を爲せしものたりしを思へば、彼か如何にその改革に務めしやを知るに足らん。彼は之にとどまらず、陸贄、陽城の賢を思ふて之を京師に召喚せしめぬ。(然れども不幸にして彼等二人は遂に死せり。)

一事は一事より成されたり。彼が働作の峻急酷烈は層一層に増し來りぬ。抵抗者は追はれ、異論者は罰せられぬ。見よ賈耽、鄭珣、瑜等は斥けられたるにあらずや。然れ共彼の改革は餘りに性急なりき。彼は陸贄が十年間になしたる所を一年に足らざる歲月を以てなさんと欲するものなり。加ふるに彼等は成功を思ふの急なる人を見て之を收むるの識なかりしなり。彼等は太子憲宗の聰明を觀破し、能はざりしにあらずや。彼等は杜黃裳の賢を察する能はざりしにあらずや。是を以て頑冥無識貪亂の徒、吾が黨に蟠窟し、遂に彼等を後より制肘するに至りぬ。思ふに彼等が失敗せし所以のものは之が爲のみ。

先づ彼等に反對を試みしは宮廷なりき。宮市の廢と進奉の嚴禁とによりて財政の困難を新に感ぜし宮廷は彼等に反抗し始めぬ。次に彼等に反對を表せしものは宦官なりき。彼等に兵權を奪はれ、吾が位地の危難を覺へし宦官は彼等に反抗し始めたりしなり。宮廷の陰謀は宦官の陰謀と相結べり。彼等は時機來らば一大打撃を王伾の黨に加へんとす。既にえて敵は味方の中に起れり。彼が引て以て相となしたる韋執誼は、内に叔文の言に従ふと雖ども、外に已はその黨與にあらざることを示さんと欲し、時々異論えて密に叔文に謝しぬ。然れどもその餘りに叔文を沮格するや叔文の心平かならず、遂

には相仇視するに至れり。宮廷と宦官との陰謀はこの時機に乗じて奏して叔文に翰林の職を奪へり。王伾の疏によりて三五日に翰林に入ることと許されたりと雖ども、彼等の勢力は最早やその過半を失ひしなり。

斯くて韋執誼の薦めたる杜黃裳は、漸く勢力を得來り、この媒介によりて黨外の英材その職を得、此等の人物と宮廷宦官の力とは、王伾の黨をして全く勢力を失ふに至らしめたり。其後韋皋、裴均、嚴綬等が太子の監國を請ふの表來り、叔文等の過惡を奏聞し群少を斥逐して政を人主より出でんことを求むるや、彼等の勢力は全く地に墜ち、憲宗の位に即くや王伾王叔文は貶せられて遂に終りぬ。

或は王伾王叔文を稱して貪亂飽くなきの小人と爲え、歴史亦頻りに彼等の過罪を列擧すと雖ども、彼等が微賤の位地より起り、勢力を吾が周圍に集めて幾多の憂患を去りしを思へば、必しも財貨是貪るの小人にあらざるなり。只其れ彼等が人を見るの明なさと、手段を犠牲にすることゝは、彼等にこの罪を得せしめたるなれ。思ふに順宗をして疾なく、憲宗の如く果斷の性あらしめば、事或は成功に近かりしならん。周公王莽の事必しも稱せず。上杉鷹山公をして反論並び起るの際に仆れしめば、彼必らずや惡奸を以て終りしならん。世人が成敗によりて是非する悲しむべし。

（七）沈黙時代

王伾王叔文の改革は功を奏せざりしといへども、又之が爲によき結果を來せり。そは時勢をして自ら賢相名主の興起を餘義なくせしめたればなり。財政は全く紊亂せり。兵權は全く分裂せり。政治は全く腐敗せり。藩鎮は全く強剛となれり。假へ王伾等によりて少しく整理されたりとはいへ。この光景は遂に之を目撃せる憲宗をして、身を全くその改革に委ねしむるに至れり。

帝曰明采斷、志平僭叛、能用忠謀、不惑群議、卒收成功、唐之威令、幾于復振、足爲中興之主。

是或人が下せる憲宗の前半生を通じたる評語なり。不幸にして、その後平生の評語に、及其晩節、信用非人、不終其業、惜哉』の言を得たりと雖ども、而も其即位の初め誠に此くの如くなりしなり。

憲宗位に即きて四ヶ月之を元和と改め、こゝに『元和の清明』の政治は始められ。憲宗が先づ爲したるは、杜黃裳に聽きて蜀を討ちたることなりき。次に爲したるは杜黃裳に聽きて賢者を擧げしことなりき。これによりて元稹、白居易等朝に入り、韓愈も亦召されて權知國子博士となれり。

彼が權知國子博士となりし以來、東都に分司となり、都官員外郎となり、河南の令に拜吏職方員外郎に遷るに至る六年間は、實に彼が沈黙を守りし時代なりき。彼が年少氣鋭なるや、心に思へらく、吾人に力と識との二つだにありたらんには、何事かならざることをあるべきと。然れども彼が經驗はその考へ只一個の理想に過ぎざることを教へたり。彼は已の目的を達せんが爲に彼が心にもなきこと爲さざる可らざることを悟れり、然れども彼が正直真摯なる心は彼に之を爲すことを許さざりき。

こゝに於て彼は沈黙して知己に逢ふの時を待つの外なきことを覺悟し、務めて世人の注意を避けんことを謀れり。彼が東都に分司とまりしは之が爲めなりき。彼が都官員外郎に改められ（四十二歳）、河南の令に拜し（四十三歳）、職方員外郎に遷る（四十四歳）の間と雖ども、彼は此の事を常に心胸に銘したりき。然れども彼が『不得敢不言』的の氣象は、尙ほ柳潤の事に坐して職方員外郎より博士に遷されたるにあらずや。彼が周圍の佞人が如何に彼の野心を怖れ、彼の正直を忌みたるやは彼の『釋言』によりて察するを得べし。加ふるに彼が文名の盛なるは、殊に人をして彼を忌み、その進路を妨げしむる媒介たらしめたり。彼自ら釋言の中に慷慨して曰く

夫傲雖凶德、必有恃而敢行、愈之族親鮮少、無叛聊之勢於今、不善交人、無相先相死之友于朝、無宿資善貨、以鈞聲勢、弱於才而腐於力、不能奔走、乘機、抵巇、以要權利、夫何恃而傲。

嗚呼、彼の無勞力なる寧ろ憐むべし。彼又當時其友崔群に與ふるの書中に述べて曰く。

僕無以自全活者、從一官于此、轉困窮此、自放于伊潁之上、當亦終得之、近者尤衰憊、左車第二牙、無故動搖脫去、目視昏花、尋常之間、便不分顏色、兩鬢半白、頭髮五分亦白其一、鬚亦有一莖兩莖白者、僕家不幸、諸父諸兄、皆康彊早世、如僕者、又可以圖于久長哉。

嗚呼、彼が身体の衰弱亦甚しき哉。

然れども、彼が一片凌々たる骨と、傲然たる精神とは、猶この裡に宿りまなり。彼釋言中に述べて曰く

愈爲御史、得罪德宗朝、同遷於南者凡三人、獨愈爲先收用、相國之賜大矣、百官之進見相國者、或立語以退、而愈辱賜坐語、相國之禮過矣、四海九州之人、自百官已下、欲以其業、徹相國左右者多矣、皆憚而莫之敢、獨愈辱先索、相國之知至矣、賜之大禮之過、知之至是三者、於敵以下受之、宜何以報、況在天子之宰乎。人莫不自知、凡適於用之謂才、堪其事之謂力、愈於二者、雖日勉焉而不近、束帶執笏、立士大夫之行、不見斥以不肖、幸矣、其何敢敖於言乎。

市の虎なさまや明かなり。而も三人之を言ふて、人之を疑ひ、三人之を告げて曾參の母遂に杵を投ず。讒言の信せられ易き、誠に懼るべし。而も彼自ら之を説きて曰く

市有虎、聽者庸也、曾參殺人、以愛惑聰也、巷伯之傷、亂世是逢也、今三賢方與天子謀所以施政於天下、而階太平之治、聽聰而視明、公正而敦大、夫聰明則聽視不惑、公正則不邇讒邪、敦大則有以容而思、被讒人者、孰敢進而爲讒哉、雖進而爲之、亦莫之聽矣、我何懼而懼。

彼が自ら恃むの深き誠に賛するに堪へたり。

(八) 進學解

彼が職方員外郎より再び博士に下さるゝや、彼が有名なる進學解はものせられぬ。此の文固より世に流布せ、人の善く誦する所、必しもこゝに挙げず。然れどもこの文よく彼が當時の境遇を説く、吾人をして少しく之に就て語らしめよ。

思ふに進學の解は彼が抑鬱の餘になりたるもの、その客難、解、嘲の諸篇と殊なるものは自家の伎倆と抑鬱とを把て、之を他人の口中より說出せしめ、已は却て虚心平氣を以て之に處するにあり。夫悲歎の甚しきには咽泣し、苦痛の甚しきには聲出です。困窮の甚たき、自らその困窮たるを痛みて尙ほ之を爾せざるより甚だしきものはあらず。其の彼が境遇を説くを聞けば曰く

公不見信于人、私不見助于友、跋前疐後、動輒得咎、暫爲御史、遂竄南谿、三年博士、冗不見治、命與仇謀、取敗幾時、冬暖而兒號寒、年豐而妻啼饑、頭童齒豁、竟死何裨。

而も彼が弄疏を聞くに曰く、

學雖勤而不由其統、言雖多而不要其中、文雖奇而不濟于用、行雖修而不顯于衆、猶且月費俸錢、歲廩廩粟、子不知耕、婦不知織、乘馬從徒、安坐而食、踵常途之役々、窺陳編以盜竊、然而聖主不知誅、宰臣不見斥、玆非其幸與。

嗚呼このイロニイの中彼が無限の悲痛を察するに足る。この悲痛は遂に彼をして進學解と作らゑめたるなり。

當時の宰相たる權德輿李絳は此の解を見て彼が才を奇とし、遂に彼をして比部郎中央館修撰の職

に就かしめぬ。思ふに權德興李絳は當時文名あるもの必らず自然に針芥相投じ才を愛して相吸引せしならん。彼は遂に知己を見出したるなり。

(九) 勢漸大なり

彼は遂に宰相の知る所となれり、而も李絳は元和の魏徵たりしを知らば、彼の力が如何に世に知られたるやを知るに足る。否な之のみにあらず。彼が友たる崔群は今擧げられて翰林にあり。其他の人々も漸く勢を得んとす。今や彼は運の段階を登りつゝあるものといふべし。

まばらしくて崔群は中書舍人に進み、彼は考功郎中知制誥となれり。彼は全しく知制誥にその知己裴度を見出しぬ。裴度は彼が後來運命を共にするものなり。まばらしくて彼は知制誥より進んで中書舍人となれり。唐制多く宰相を中書舍人より求む。然らば今や彼は宰相に進むべき位地にありといふべく。彼が勢は今や漸く大となりしなり。

(十) 論淮西事宜狀

予は今、彼が最盛時代を説くの前に當り少しく淮西に就て語らざるべからず。淮西とは即ち淮河の西吳元濟の屯する所を指すものにして、同じく藩鎮の一なり。始めて憲宗の位につくや、之を輔佐するものは皆な忠良の臣、明良よく時に合するを以て、その施す所の政策一々其事に適し、所謂元和の清明はこゝに勃興し來れり。憲宗は就中意を命に抗する藩鎮の征討に用ひ、一罪の名あるものは皆之を征して假借する所なかりき。左れば藩鎮多くは之が爲に色を失ひ或は降り或は献するに地を以てするに至りぬ。然れども淮西の三鎮は自ら其を恃んで敢て降らず、屢々官軍をなやましたりき。

斯くの如くにして淮西の征討久しく功あらざるや、朝議はこゝに二つに分れぬ。一は飽くまでも淮

西を討せんとするもの、一はまばらく之を許して時期を待たんとするもの、甲は今にして之を許せば廟堂威信立たずと主張し、乙は兵既に疲れ、軍費漸く欠乏すと稱す。何れも理なきにあらず、然れどよく其の真相を窺ふに淮西は誠に討せざる可らざるものあるなり。彼等の強傲なる所以は、三鎮竊に相救援するによるものにして李師道王承宗の如きは、在廷の諸臣に賄して政策を後より制肘せしむるを以てなり。左れば今にして之を許さんか、廷の威信の行れざるは勿論、今後到底之を征服するの期なきなり。韓愈裴度武元衡の如きは尤も征討の主張者にして、銳意事を慮るものなり。憲宗亦之を欲すと雖ども彼等に反對する者は、種々なる手段を以て、その志を挫かんとせり。故を以て憲宗は遂に裴度をして淮西の行營を宣慰し吾軍用兵の形勢を察せしめぬ。裴度還り來りて曰く、淮西必らず取るべし。我軍の諸將を觀るに李光顏勇にして義を知る、必らず能く功を立つべしと。この時に當り李師道復陰に淮西の援を爲し、盜を募りて河陰の轉運院を攻め錢帛三十餘萬緡匹、穀二萬餘斛を燒きぬ。こゝに於て人情慄懼去、先きに反對せるもの、紛々として兵を罷むべきをいふ。韓愈憲宗の請ふ所に徇はんを恐れ論淮西事宜狀を上りて、其の早く斷せざるべからざることを説き其の取るべき策を述べ。曰く

右臣伏以淮西三州之地、自少陽疾病、去年春夏已來、圖爲今日事、有職位者、勞於計慮撫循、奉所役者、脩其器械防守、金帛糧蓄、耗於賞給、執兵之卒、四向侵掠、農夫織婦、携持幼弱、餉於其後、雖時侵掠、小有所得、力盡筋疲、不償其費、又聞畜馬甚多、自半年已來、皆上槽櫪、譬如有人、雖有十夫之力、自朝及夕、常自大呼跳躍、初雖叫畏、其勢不久必自委頓、乘其力衰、三尺童子、可使制其死命、況以三小州殘弊困劇之餘、而當天下之全力、其破敗可立而待也、然所未可知者、在陛下斷與不斷耳、夫兵不

多、不足以必勝、必勝之師、必在速戰、兵多而戰不速、則所費必廣、兩界之間、疆場之上、日相攻劫、必有殺傷、近賊州縣、徵役自端、農夫織婦、不得安業、或時少遇水旱、百姓愁苦、當此時、則人々異議、以惑陛下之聽、陛下持之不堅、半途而罷、傷威損費、爲弊必深、所以要先決於心、詳度本末、事至不惑、然可圖功、爲統帥者、盡力行之於前、而參謀議者、盡心奉之於後、內外相應、其功乃成、昔者殷尚宗、大聖之主也、以天子之威、伐背叛國、三年乃克、不以爲遲、志在立功、不計所費、傳曰、斷而後行、鬼神避之、遲疑、不斷、未有能成其事者也、臣謬承恩寵、獲掌、綸誥、地親職重、不同庶寮、輒竭愚誠、以效裨補、謹條次平賊事宜一二如後。

第一款は客兵を徵するは土人を召募するに加かざることを論ず。

諸道發兵、或三二千人、勢力單弱、羈旅異鄉、與賊不相諳要、望風懾懼、難便前進、所在將帥、以其客兵難處使、先不存優恤、待之既薄、使之又苦、或被分割隊伍、隸屬諸頭、士卒本將、一朝相失、心孤意怯、難以有功、又其本軍各須遣、道路遼遠、勞費倍多、士卒有征行之艱、閭里懷離別之思、今聞陳許安唐汝壽等州、與賊界連接處、村落百姓、悉有兵器、小々俘劫、皆能自防、習於戰鬪、識賊深淺、既是土人、護惜鄉里、比來未有處分、猶願自備衣糧、共相保聚、以備寇賊、若令召募、立可成軍、若要添兵、自可取足、賊平之後、易使歸農、伏請諸道先所追到行營者、悉令却牒歸本道、據行營所追人額、器械弓矢、一物已上、悉送行營、充給所召募人、兵數既足、加之教練、三數月後、諸道客軍、一切可罷、比之徵發遠人、利害懸隔。

第二款は堡柵兵馬の聚むべくして分つべからざるを論ず。

繞逆賊州縣、堡柵等各置兵馬、都數雖多、每處則至少、又相去濶遠、難相應接、所以數被攻劫、致有損

傷、今若分爲四道、每道各置三萬人、擇要害地、屯聚一處、使有隱然(十敵國)之望、審量事勢、乘時逐利、可入則四道一時但發使其狼狽驚惶、首尾不相救濟、若未可入則深壁高壘、以逸待勞、自然不要諸處多置防備、臨賊小縣、可收百姓於便地、作行縣以主領之、使免散失。

第三款は交戰には恩威並行はるべきを論ず。

蔡州士卒、爲元濟追脅、勢不得已、遂與王師交戰、原其本根、皆是國家百姓、進退皆死、誠可閔傷、宜明勅諸軍、使深知吐意、當戰鬪之際、固當以盡敵爲心、若形勢已窮、不能爲惡者、不須過有殺戮、喻以聖德、放之使歸、銷其兇悖之心、貸以生全之幸、自然相率棄逆歸順。

第四款は兵を用ゆる當に持久すべし費を惜むべからざることを論ず。

論語曰欲速則不達、見小利則大事不成、比來征討無功、皆口欲其速捷、有司計算所費、苟務因循、小不如意、卽求休罷、河北淮西等、見承前事勢、知國家必不與之持久、併力苦戰、幸其一勝、卽希冀恩赦、朝廷無至忠憂國之人、不惜傷損威重、因其有請、便議罷兵、往日之事患皆然也、臣愚以爲淮西、三小州之地、元濟又甚庸愚、而陛下以聖明英武之資、用四海九州之力、除此小寇、難易可知、太山壓卵、未足爲喻。

第五款は軍中の賞罰、宜しく加重して行ふべきを論ず。

兵之勝負、實在賞罰、賞厚可令廉士動心、罰重可令凶人喪魄、然可集事、不可愛惜所費、憚於行刑。

第六款は李師道王承宗をして元濟を援けざらしむる策を論ず。

淄青恒冀兩道、與蔡州氣類略同、今聞討伐元濟、人情必有救助之意、然皆闇弱、自保無暇、虛張聲勢、則必有之、至於分兵出界公然爲惡亦必不敢、宣特下詔、云蔡州自吳少誠已來、相承爲節度使、亦微有

功效、少陽之歿、朕亦本擬與元濟、恐其年少未能理事、所以未便處置、待其稍能緝綏、然後許其承繼、今忽自爲狂悖侵掠、不受朝命、事不得已、所以有此討伐、至如淄青恒州范陽等道、祖父各有功業、相承命節、年歲已久、朕必不利其土地、輕有改易、各宜自安、如妄白疑懼、敢相扇動、朕卽赦元濟不問、廻軍討之、自然破膽、不敢妄有異說。

議論固より一二の弱點なきにあらずと雖ども、當時之に應ずるの策これを措て他に求む能はざるなり。其の後△西の降將董重質、杜牧に語て曰く

△西三小州、所以久不破者、由徵兵數少、不能成軍、帖地主、每戰必令居前、勝則主帥引援以爲已功、小不勝則先退、至有繼焉、二年已後、客軍殫少、止與陳許河陽全軍相搏、縱使唐州軍不能因雪取城、蔡△西亦不支、其時朝廷若使鄂壽唐保境、不用進戰、但用陳許鄭滑兩道全軍、帖以宣潤擊手、令其守隘、卽不出一歲無蔡州矣。

是に由て之を觀るに彼が徵兵守隘二有の如き殊に敵を料ること神の如しといはざる可らず。

然れども彼が意見は不幸にして採用せられざりき。否な彼は却て之が爲に中書舍人より太子右庶子に下されたりしなり。當時憲宗の信を得たる裴度にして、尙ほ其の地位の危かりしを知るものは、愈の執政に疾まれて太子右庶子に下さるゝことを怪しむざるべし。

彼が意見は採用せられざりき。然れども彼はこのまゝにして止まず。彼は遂に書を飛ばして之を淮西の行營に告げ、こゝに與柳中丞書とはなれり。

(第五章未完)